平成30年6月8日

豊岡市長
中貝宗治　殿

一般社団法人　日本建築学会近畿支部
支部長　三輪康一

豊岡市民会館の建物の保存活用に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴市におかれましては、兵庫県豊岡市立野町20番34号に位置いたします豊岡市民会館の建物について、出石文化会館（ひぼこホール）と合わせて機能を統合し、新しい施設に建て替える計画であること、新聞等の報道により聞き及んでおります。

当該建物は、1971（昭和46）年に建設されたもので、設計者は京都大学教授で建築家であった増田友也（ますだともや／1914-81年）です。その建築の有する価値は、別紙「見解」に記されたとおり、戦後日本の建築として高いものであり、また地域の公共施設としてかけがえなきものであります。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。またその際、オリジナルの建物の価値を損ねないような細心の注意を払ったデザインや技術が必要になります。

貴市におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の歴史的な価値を保つための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 30 年 6 月 8 日

豊岡市民会館の建物についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査　笠原一人

1）建築の概要

兵庫県豊岡市立野町 20 番 34 号に位置する豊岡市民会館は、1971（昭和 46）年に竣工した鉄骨鉄筋コンクリート造および鉄筋コンクリート造、地上 4 階、地下 1 階、塔屋 2 階の規模からなる建物である。敷地面積は 8,000 ㎡、建築面積 2,206 ㎡、延床面積 6,800 ㎡である。設計者は財団法人建築研究協会一級建築士事務所・増田研究室である。これは、当時京都大学教授を務め、建築家としても活躍していた増田友也（ますだともや／1914-81 年）の設計であることを意味している。施工は錢高組が担当した。

建物の敷地は、豊岡市内の中心部に近い旧円山川のそばに位置する。かつてこの川が本流だった頃、川幅が狭く蛇行していることから水害が絶えなかったため、戦後間もなく改修され、川幅を広げて現在の円山川の位置に移設された。1968 年から、移設によって廃川となり残されていた旧円山川とその周辺を公園化する計画が生じ、その一環で市民会館が建設されることになったものである。また、豊岡市市政 20 周年の「中心的大事業」として実施された。

当該建物は、多少の改修は見られるが、外観から内部のホールや会議室、和室に至るまで、全体として竣工当時の姿を現在もよくとどめている。

2）建築史学上の価値

2-1）デザイン的価値

この建物は、増田友也の代表作の一つとして、増田の作品集である『現代日本建築家全集　14　吉武泰水・増田友也・内田祥哉・高橋靹一』に掲載されている。増田の作品の多くは、打ち放しコンクリートを多用し、ル・コルビュジエの影響を受けたと見られるデザイン言語を用いた、いわゆるモダニズム建築である。当該建物も、同様のデザイン言語で設計されている。

建物の構成は、楔形の大きなボリュームのホール棟と会議室や図書室などを収めた会館棟の 2 つの棟から成る明快なものである。全体に鉄筋コンクリートの上から白く塗られているが、これは積雪の多い豊岡の風景になじむことを意図したものだという。

2 棟の間に設けられた玄関部分へのアプローチは、川の堤防の段差を利用して上下の変化を作りだしている。またこれらの 2 棟に絡みつくようにして、抽象的な形態によって造られた階段室やベランダ、窓枠などが配されている。それらは一様に打ち放しコンクリートの仕上げであることから、白い壁面と対比を成しながら、建物に複雑な様相を与えている。

屋内でも、ホールでは細い棒状のコンクリートが壁面に並べられて繊細な表情を造り、会館棟では吹き抜け空間が設けられ、大会議室ではブリーズ・ソレイユと呼ばれる縦型の日よけが細かな影を作り出すなど、変化に富んだ空間が造られている。

また建物全体が、ピロティ形式（高床式）で地面から 1 階分持ち上げられるようにして建っていることも特徴である。これは、そばを流れる旧円山川が氾濫した際に建物に被害が少ないように、水面から離した結果のものである。敷地の特徴が建物のデザインにもよく反映されている。

我が国では、1950 年代から 60 年代にかけて地方自治体による市民会館や公会堂の建設が相次いだ。この間に八幡市民会館（1958 年／村野藤吾設計）や今治市民会館（1966 年／丹下健三設計）、京都会館（1960 年／前川國男設計）、岐阜市民会館（1967 年／坂倉準三設計）など、著名な建築家による数多くの優れた会館建築が生まれた。増田友也も西宮市民会館（1967 年）の設計を手掛けている。

豊岡市民会館はこうした戦後の市民会館建設ブームの中で造られたものであり、抽象的な形態を用いたコンクリートによる表現や、正面に建つ高層部分の 1 階のピロティ、その奥に広がる広場、明快なデザインなどは、当時の市民会館の一つの典型である。

つまり当該建物は、時代や新しい社会にふさわしい普遍的な特徴を持ちつつ、同時に豊岡という地域の風土や敷地の特徴を生かしたものとなっている。

2-2）増田友也の作品としての価値

当該建物は、戦後に活躍した建築家で京都大学教授を務めた増田友也によって設計されたものである。増田は兵庫県三原郡に生まれ、1939 年に京都帝国大学建築学科を卒業している。その後 1950 年から京都大学の教員となり、1978 年に同大学を退官した。その間、同大学の教育をリードし、また「建築論」と呼ばれる独自のジャンルを築き上げたことで知られる。

「建築論」とは、いわば「建築とは何か」を問う学問であり、ハイデガーや現象学などの哲学を手掛かりに、建築のあり方や表れ方を考察しようとするものである。建築における「京都学派」と呼ばれるまでに、その独自の分野を確立したのが増田だった。その流れは、現在も京都大学建築学科に継承されている。

こうした新しい学問の分野を確立させる一方で、増田は建築家として多くの作品を遺している。その多くは、勤務先のあった京都府下に見られ、智積院会館（1966 年）や京都大学総合体育館（1972 年）など、複数の建築が京都に現存している。また増田が淡路島に生まれたためか、兵庫県下や徳島県下にも複数の作品を遺している。洲本市庁舎（1964 年）や西宮市民会館（1967 年）、鳴門市庁舎・同市民会館（1963 年）などがある。

そんな増田の作品としての豊岡市民会館は、コンクリートによる抽象的な形態を組み合わせた点では、他の作品と共通しているが、他の作品に比べると全体を構成する形態が豊富で、陰影も様々で様々な空間が生み出されているのが大きな特徴である。

2-3）地域遺産としての価値

当該建物は、竣工当時から現在に至るまで、市民に利用され続け、豊岡市の公共施設として根付いている。しかも前述のように、設計者の特徴がよく表れ、旧円山川という場所の特性を考慮した建物となっている。終戦からすでに70年以上が経ち、戦後の建築も歴史的な遺産となりつつある。当該建物も、建設からすでに45年以上が経過しており、戦後の豊岡市の繁栄を象徴するものとして、歴史的価値と文化的価値を有している。

また設計者の増田友也が設計した建築物は、生まれ故郷である兵庫県や勤務先であった京都府に集中しており、当該建物はその一つに位置づけられる。つまり当該建物は、地域ゆかりの建築家によって設計された複数の建築作品群の 1 つとして、やはり地域の遺産として位置付けることができる。

3）期待される活用

前述のように、当該建物はそのデザインに優れ、また時代性や場所性を反映し、さらに地元の建築家によって設計された文化的歴史的価値の高い建物である。このような優れた建物が損なわれ、あるいは失われるようなことがあっては、地域や我国の建築文化にとっても大きな損失である。

当該建物のような鉄骨鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっている。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011年6月に「マドリッド・ドキュメント」を採択したが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした 20 世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を用いて、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言している。建物の保存活用は、世界的な潮流になりつつある。

地方自治体の市民会館についても、近年、1950年代から60年代にかけて建設された建物に耐震や免震による改修を行い、保存活用する事例が増えている。例えば米子市公会堂（1958年）は、文化勲章を受章した建築家村野藤吾の設計によるものだが、近年耐震補強工事が行われ、オリジナルの建物の姿を保ちながら保存活用され、改修前よりも賑わっている。また神奈川県立音楽堂（1954年）は、日本の近代建築を主導した建築家前川國男の設計により 1954 年に竣工したものであるが、2008 年度と 2009 年度に耐震改修を行い、2018 年度にも改修工事が行われている。このように各地で、戦後の優れた会館建築についての保存活用の事例が増えている。

その改修に際しては、オリジナルの建物の歴史的、文化財的価値を可能な限り損ねない工夫やデザインが必要となる。豊岡市民会館は、現在も竣工当時の機能を大きく損なうことなく使い続けられ、歴史的文化的価値を維持している。今後も、建物が持つ歴史的、文化的価値を保存・維持しながら、機能性や耐震性を高め、活用されることが望ましい。よって多角的なご検討と叡慮により、当該建物の保存と活用が計られるよう切望するものである。

豊岡市民会館　１

豊岡市民会館　２